

慶良間で何が起きたのか①

人間の尊厳を懸けた戦い 上原正稔

はじめに、2011年1月31日

曰くは琉球新報を憲法の表現の自由違反と著作権侵害で訴えた。その内容は慶良間の「集団自決」の真相を伝えようとする一家を封殺して弾圧する新聞社の横暴ぶりを告発するものだった。これだけでも前代未聞の大事件だが、沖繩の新聞社もテレビも黙殺を続けてきた。そんなわけではよくの戦いを知る沖繩の人々はほとんどいなかった。そんな中で八重山日報が去る一月と三月に江崎孝さんの「上原正稔の挑戦」を掲載し、そのニュースはあつという間にインターネットを通じて全国に広がった。琉球新報も沖繩タイムスも自分たちの都合の悪いニュースは一切黙殺を続けている。しかし、今、八重山日報に続いて、五月十日には「うらそえ文藝」が江崎孝さんの八重山日報の「上原正稔の挑戦」論考の縮刷版を発表する運びになった。

読者もよくご存じのように教科書問題では八重山日報は傲り高ぶった沖繩タイムスと琉球新報に対し、敢然と「真実の報道」を続け、見事に勝利したと言ってもよい。真実は多数決で決まるものではないことを証明したのだ。ほくの数えるほどしかない友人らはほくのことを「勇気がある」と評するが、それは勇気ではない。人のために尽くす、自分のために尽くすな、とほくの尊敬するロジャー・ビノー先生から教えられた。その言葉を守っているだけだ。「集団自決」の問題は実は「自分自身のために尽くしている」琉球新報と沖繩タイムスに対する「人間の尊厳を懸けた戦い」なのだ。それをこれから伝えよう。

2006年初頭、ほくは琉球新報の編集長から沖繩戦の長期連載を依頼された。何年でも自由に続けてくれ、ということだった。それだけほくを信頼してくれていたのだ。第一弾としてその年の四月から年末まで「戦争を生き残った者の記録」147回を発表し、好評を博したと言つてよい。何の問題も起きなかつた。第二弾の「バンドラの箱を開ける時」が2007年5月末から始まり、その冒頭でほくは次のように予告した。

「第一話 慶良間で何が起きたのかは今、世間の注目を浴びている。集団自決についてアメリカ兵の目撃者や事件の主人公たちの知られざる証言を基に事件の核心を突くものになるだろう。」だが、第二話が発表されることはなかつた。ほくの物語はその後、四ヶ月間中断した。一体何があつたのか。ほくの連載の担当者とあつたM記者には多くの原資料と一週間の原稿を渡していた。その時、Mはこれもおもしろそうだな、と嬉しそうに言つた。そして翌日上京することになつていると話した(東京で何があつたのか、誰に会つたのか、そのうち明らかにするだろう)。六月十五日(金)のことだつた。ところが、六月十八日の月曜日、Mから新報社に来てくれ、と連絡が入つた。新報社に着くと、Mはヤケに威張つた調子で、ほくを編集部の上の階の空き部屋へ連行した。そこには顔見知り

の編集記者三人が難しい顔をしてほくを待っていた。Mはいきなり言つた。「第二話は載せないことにした。」何だぞ！とどういふことだ。ほくは怒鳴つた。記者の一人が「新報の編集方針に反するからだ。」と冷やかに言つた。別の記者は「君は何年か前に同じ記事を書いてるじゃないか。重複は許さん。」ほくは言つた。「それは君らの屁理屈だ。僕は第一話の伊江島戦でも日本側とアメリカ側の両方の資料を使つていて。その一つは既に新報で発表している。沖繩戦ショウタウンを使つたぞ。第二話も「沖繩戦ショウタウン」や多くの資料を使つて4、50回の長編にして赤松、梅澤の名譽を回復するものにするつもりだつたのだ。その資料はMにも渡している。彼は喜んで「いたぞ。」だが、四人組はできないものではできない一点張りて前に進まない。ほくは言つた。「君たちにはほくの連載にストップをかける権利があるのか。表現の自由の権利を侵しているんだぞ。ほくは記者会見でこれを発表する。」一人の記者(現編集局長)があわてて「記者会見はやめてくれ」と言つた。話は決裂した。

こうして6月19日から始まることになつて「慶良間で何が起きたのか」が発表されることはなかつた。翌日から予告を読んで期待していた読者から新報に抗議や問い合わせが殺到し、新報社内は騒然となつた。ブログで毎日のように「バンドラの箱」を追つていた江崎孝さんもそんな読者の一人だつた。一般の読者は気づかなかつたが、彼は「言論封殺」が起きていることをいち早く悟つていた。そのことは「上原正稔の挑戦」で詳しく述べられている。産経新聞の小川さんも同様だ。二人とも報道に関わっているから敏感なのだ。

実はこの時期2007年6月は琉球新報と沖繩タイムスが「集団自決には命令があつた」とする大キャンペーンの真つ最中であつたことを忘れてはならない。3月31日政府が「教科書から集団自決の軍命削除」の記事が新報、タイムス両新聞で大々的に報道され、大キャンペーンが始まつていたので。新報とタイムスはオビニオンリーターとしてその社説や社会面、文化面で各市町村に働きかけ、8月までには全市町村が「集団自決には軍命あり」の決議が出されているという異様な状況だつた。しかもその議決文がほとんど同じ文面を並べている始末だつた。

「バンドラの箱」が中断し、読者からの抗議や問い合わせが殺到しても琉球新報が上原正稔の筆を折つても凶々しく構えていた理由もそこにある。中断から四ヶ月後、Mが連載担当から除かれ、連載を再開することにし、読者には申し訳ないが「慶良間で何が起きたのか」は飛ばすことになつた。(つづく)

慶良間で何が起きたのか②

人間の尊厳を懸けた戦い

上原正稔

二〇〇八年八月上旬、1770回に達した頃、ぼくの連載を担当している記者が「編集部の方からバンドラの連載をそろそろ終わってほしいかと言ってきた」と伝えた。ほかの連載が予定されているからだそう。ぼくは、いよいよ来たか、と思つた。ほかの連載が予定されている、というのは嘘だ、と知っていた。だが、ぼくは「それじゃ、八月一杯で終わろうな」とあっさり言つた。新報社内のギスギスした雰囲気はうんざりしたからだ。そこで、「最終章」をして人生は続く」を短くまとめることにした。最終章四回目にぼくは「フット運動の醜い内幕を暴露する原稿を出した。案の定、編集部は書き換えるよう指示してきた。そこでも、ぼくはあっさり折れ、差し障りのない話にまとめた。だが、最後の五回目(181回)には、ぼくは「慶良間で何が起きたのか」について短くまとめ、原稿を出した。もちろん、今度も編集部は書き換えを指示してきた。だが、ぼくの腹は決まっていた。これで終わりだ、書き換えることは絶対ない、と通告した。編集部はぼくの友人

であつた社長を入れて鳩首会議を開き、最後の原稿はボツにすることになった。こんなわけでもなく、「おわり」を告げるぼくの声も聞かれない。前代未聞の出来事だ。

三年間の連載を不本意に終えて間もない2008年10月、うらそえ文藝誌の星雅彦編集長から連絡が入り、会うことになった。彼の雑誌で「集団自決」の真相について対談したい、と言うのだ。彼はぼくと新報の「喧嘩」を耳にしていた。ぼくは星さんの顔を知っていたが、話したことはなかった。彼も長い間、鉄の暴風」が間違いだらけであることを知っていて、ぼくの「バンドラの箱」が中断した後、琉球新報に「鉄の暴風」について小論を出したところ、編集方針に反する、ということでは採用になつた、ということだ。そして、まもなく、彼が長年担当してきた新報の美術評論も外された、ということだ。新報の担当者に理由を聞くと、「星さんの文章は難しいからだ」とすぐバツを言つた、というのだ。実は沖繩人にはこうしな

嘘を平気でつくという習性があるのは確かだ。ぼくはこうして、「うらそえ文藝」で「人間の尊厳を取り戻す時、誰も語れない。集団自決の真実」を発表した。そして、同時に「集団自決をめぐる」を題する星さんとの対談の中で、沖繩タイムズと琉球新報を痛烈に批判したが、ぼくが再び、両紙で連載することはなかった。ぼくは既にルビコン川を渡つてしまつたのだ。ぼくはこれからも赤松さんと梅澤さんの名譽を回復することに全力をかけて戦いを続けていくだろう。それが沖繩の子どもたち、そして子孫たちに真の誇りを伝えていくことにならなければならない。今、ぼくは人間の尊厳をかけた「戦争」の真只中にいる。

以下は「慶良間で何が起きたのか」短いながらも読者が理解しやすいようにまとめたもので、2009年「うらそえ文藝」で発表した「人間の尊厳を取り戻すとき」に若干手を加えたものである。

極の舞台」として物語を書き、読者に伝えてきた。だから、反戦作家ではない。それどころか、僕は戦争の物語から「人間とは何か、そして自分とは何か」知ろうとしてきた。そして人間について多くのことを学んだ。

人はよく戦争とは醜いものだと言ふ。だが、僕は最も醜いはずの戦争の中に最も美しい人間の物語を発見し、それを読者に紹介してきた。暗黒の世界に一条の光が差し込むと、その希望の光は真夏の太陽よりも眩しいものだ。米須精一、グレン・ネルソン、グレン・スローターの三人組が洞窟に隠れている住民数千人を救出した話、轟の壕で玉城朝子さんとい美しい女性が数千人の住民と兵士を説得し、投降させた話など例を挙げればキリがない。僕は数々の戦争の物語を伝えてきたが、まだ伝えていない大切な物語がある。それは慶良間の「集団自決」の話だ。そこには誰も語らない、語れない物語がある。そこには、「希望の光」が残されているのだろうか。

「集団自決」をめぐる論争

2007年沖繩では沖繩タイムズと琉球新報が「慶良間の集団自決は軍命令によるものだ」というキャンペーンを張り、ほとんどの読者は「赤松と梅澤が

自決を命令した」と思い込んで「安心」している。この問題は、渡嘉敷の海上挺進第三戦隊長であつた故赤松嘉次さんの弟、秀一さんと座間味の海上挺進第一戦隊長であつた梅澤裕さんが「自決命令を出していない」として、その名譽を傷つけたとする「沖繩ノート」の著者大江健三郎さんと出版社の岩波書店を訴えたことに起因する。だが、その真の原因は五十年間のロンゲセラーを続けている沖繩タイムズの「鉄の暴風」に在ることは誰の目にも明らかだ。

一九五〇年沖繩タイムズ(販売元朝日新聞)は「鉄の暴風」を2万部発刊した。この本によって「赤松大尉と梅澤少佐は集団自決を命令した極悪人」であることが「暴露」され、そのイメージが定着した。一九七〇年、曾野綾子さんが赤松さんから第三戦隊の隊員らに取材し、現地調査を行い、「ある神話の背景」を著(あらわ)し、「赤松嘉次さんは集団自決を命令していない」と発表した。だが、沖繩の人々が曾野綾子さんの真実の言葉に耳を傾けることはなかった。僕もその一人だつた。ちょうど、野化したばかりの雁の雛が、最初の目にした動物を母親だと思つて、ついて行くように、若い頃植え付けられた先入観を払拭することは困難なのだ。(つづく)

慶良間で何が起きたのか③

人間の尊厳を懸けた戦い — 上原正稔

— 神もおののく集団自殺

僕は一九八五年、タイムズ紙上でアメリカ第10軍のG2情報部のG2サマリーを中心にした「沖繩戦日誌」を連載し、その中でニューヨーク・タイムズの報道する渡嘉敷住民の「集団自殺」を発表した。その要旨に次のようなものだった。

神もおののく集団自殺—三月二十九日発。昨夜我々第77師団の隊員は、渡嘉敷の険しい山道を島の北端まで登りつめ、一晩そこで野営することにした。その時、一マイルほど離れた山地から恐ろしいうめき声が聞こえてきた。手榴弾が七、八発爆発した。偵察に出ようとする仲間の中から狙い撃ちにされ、仲間の中の一人が射殺され、一人は傷を負った。我々は朝まで待つことにした。その間、人間とは思えない声と手榴弾の爆発が続いた。ようやく朝方になり、小川に近い狭い谷間に入った。何ということだろう。そこは死者と死を急ぐ者たちの修羅場だった。この世で目にし

ン氏は26日「問題点」大きな権限を持ち、12は残っている」と厳し「会計年度では移転関連は移転関連費用を全額削減。危機感強く指摘する声明を重ねる。一方、共同文書を受

決策—としてきた名護さらには迷走するのは必至。基地固定化の懸念「米軍再編見直しに関する共同文書発表を受

た最も痛ましい光景だった。ただ聞こえてくるのは瀕死の子供たちの泣き声だけだった。そこには二百人ほどの人がいた。

(注：第77師団G2リポートは二百五十人と記録している) そのうちおよそ百五十人が死亡、死亡者の中に六人の日本兵(※)がいた。死体は三つの小山の上に束になって転がっていた。およそ四十人は手榴弾で死んだと思われる。周囲には不発弾が散乱していた。木の根元には、首を絞められ死んでいる一家族が毛布に包まれ転がっていた。母親だと思われる三十五歳ほどの女性は、紐の端を木にくくりつけ、一方の端を自分の首に巻き、前かがみになって死んでいた。自分で自分の首を絞め殺すことは全く信じられない。

小さな少年が後頭部をV字型にざっくりと割れたまま歩いていった。軍医は助かる見込みのない者にモルヒネを注射し、痛みを和らげてやっめた。全部で七十人の生存者がいたが、みんな負傷していた。生き残った人々は

アメリカ兵から食事を施されたり、医療救護を受けたりすると、驚きの目で感謝を示し、何度か頭を下げた。「鬼畜米英の手にかかるとする日本の死を選べ」とする日本の思想が間違っていたことに今、気づいたのだらう。自殺行為を指揮した指導者への怒りが生まれた。数人の生存者が一緒に食事をしているところに生き残りの日本兵(※)が割り込んできた時彼らは日本兵に向かって激しい罵声を浴びせ、殴りかかろうとしたのでアメリカ兵が保護してやっめた。なんとも哀れだったのは、自分の子供たちを殺し、自らは生き残った父母らである。彼らは後悔の念から、泣き崩れた。

以上が一九四五年四月二日のニューヨーク・タイムズが報じた渡嘉敷住民の集団自殺の要旨だ。だが、僕はこの記事を公表した時点で気付かなかったが、※印を付した日本兵とは実は防衛隊員であったことを知ったのは一九九五年春と夏に渡嘉敷島に渡って現場調査をした時だっ

た。アメリカ兵には日本兵と防衛隊員の区別がつかなかったのだ。その前年の一九九四年、僕は戦後五十周年に沖繩を訪れるアメリカ人遺族関係者を迎えるため「おきなわプラス50市民の会」を組織し、その活動の中でアイブ・ターベンポートさんから渡嘉敷の「集団自殺」を目撃したクレン・シアレス伍長の手記を入手した。それは衝撃的なものだった。一九九六年六月、僕はそれを「沖繩戦シヨウダウン」と題して琉球新報紙上で発表した。その一部を次に紹介しよう。

一九四五年四月二十七日夜明け、僕たちは渡嘉敷の最南端の浜に上陸し、山の小道を登る途中で三人の日本兵を射殺し、目的地に着くと信号弾を打ち上げ、味方の艦隊の砲撃が始まった。「山を下りて阿波連の村を確保せよ」との命令を受けた。その途中、小川に出くわした。川は干上がり、広さ十メートル、深さ三メートルほどの川底のくぼみに大勢の住民が群がっている。俺たちの姿を見るや、住民の中で手榴弾が爆発し、悲鳴と叫び声が谷間に響いた。想像を絶する惨劇が繰り広げられた。大人と子供、合わせて百人以上の住民が互いに殺し合い、ある

いは自殺した。俺たちに強姦され、虐殺されるものと狂信し、俺たちの姿を見たとなん、惨劇が始まったのだ。年配の男たちが小っちゃな少年と少女の喉を切っている。俺たちは「やめろ、やめろ、子供を殺すな」と大声で叫んだが、何の効果もない。俺たちはナイフを手に入れている大人たちを撃ち始めたが、逆効果だった。狂乱地獄となり、数十個の手榴弾が次々、爆発し、破片がビュンビュン飛んでくるのでこちらの身も危ない。全く手がつけられない。「勝手にしやがれ」とばかり、俺たちはやむなく退却し、事態が収まるのを待った。医療班がかけつけ、全力を尽くして生き残った者を手当てしたが、既に手遅れで、ほとんどが絶命した。

この阿波連のウプガール上流の集団自殺については、いかなる沖繩戦の本にもなく、タイムズも新報も全く触れていない。だが、第三戦隊陣中日誌は記す。「三月二十九日、悪夢のごとき様相が白日眼前に晒された。昨夜より自決したる者約二百名(阿波連においても百数十名自決、後判明)。クレン・シアレスさんの手記を見事に裏付けて

(つづく)

慶良間で何が起きたのか④

人間の尊厳を懸けた戦い—— 上原正稔

現地調査で知った意外な事実
一九九五年夏、僕は渡嘉敷の金城武徳さんに案内され、島の最北端「北山(ニシヤマ)」に向かった。だが、金城さんは、ここは北山ではなくウアラヌフルモーで第一玉碎場と呼んでいると説明した。僕は「鉄の暴風」で植え付けられた自分の思い込みに呆れたが、さらに驚いたことに、金城さんと大城良平さんは「赤松隊長は集団自決を命令していない。それどころか、村の人たちから感謝されている。」と言うのだ。そこで「鉄の暴風」で隊長の自決命令を伝えたときとされている比嘉(旧姓安里)喜順さんに会って事件を聞くと、「私は自決命令を伝えたことはない。赤松さんが自決命令を出したとする。『鉄の暴風』は嘘ばかりです。世間の誤解を解いて下さい。」と言う。知念朝睦さんに電話すると、「赤松さんは自決命令を出していない。私は副官として隊長の側について、隊長をよく知っている。尊敬している。嘘の報道をしている新聞や書物は読む気もしない。赤松さんが気の毒だ」と言う。これは全てを白紙に

戻して調査せねばならない、と決意した。渡嘉敷村史、沖繩県史など様々の証言を徹底的に検証した結果、次のような住民の動きが浮上した。三月二十七日、村の防衛召集兵は前夜から「敵が上陸して危険だから北山に移動せよ」と各地の避難壕を走り回った。渡嘉敷村落の西側の避難場所北山には古波蔵村長ら村の有力者をはじめ数百人が集まった。(前年の村の人口は一四四七人であることに注意)そこで古波蔵村長、真喜屋前校長、徳平郵便局長ら村の有力者会議が開かれ、「玉碎のほかにない」と皆、賛成し玉碎が決められた。一方、赴任したばかりの安里巡査は村民をどのように避難誘導しようかと考え、軍と相談しようと思いい、赤松隊長に会いに行った。安里巡査が赤松隊長に会うのはこれが最初だった。赤松隊長は「私達も今から陣地構築を始めるところだから、部隊の邪魔にならない場所に避難し、しばらく情勢を見ていてはどうか」と助言した。安里巡査は古波蔵村長ら村の有力者にそのように報告した。ところが防衛隊員の中には既に妻

を殺した者がいて、「このまま敵の手にかかるよりも潔(いさぎよ)く自分達の手で家族一緒に死んだ方がいい」と言い出して、先に述べたように村の有力者たちは集まって玉碎を執行しようということになった。防衛隊員も住民も既に平常心を失っていた。早まるな、という安里巡査に耳を傾ける者はいなかった。防衛隊員らは「赤松隊長の命令で、村民は全員、陣地裏側の北山に集まれ。そこで玉碎する」とふれ回った。住民は皆、死ぬことに疑問はなかった。最北端のウアラヌフルモーを埋め尽くした住民と防衛隊員は黙々と「その時」を待っていた。防衛隊員から手榴弾が手渡された。天皇陛下のために死ぬ、国のために死ぬのだ。砲弾を雨あられと降りしている恐ろしい鬼畜は今にもここにやってくるのだ。夕刻、古波蔵村長が立ち上がり、宮城遷葬の儀式を始めた。村長は北に向かって一礼し、「これから天皇陛下のため、御国のため、潔く死のう」と演説し、「天皇陛下万歳」と叫んだ。皆もそれに続いて両手を挙げて斉唱した。村長は手本を見せよう

と、手榴弾のピンを外したが爆発しない。石に叩きつけても爆発しない。見かねた真喜屋前校長が「それでは私が模範を見せよう」と手榴弾のピンを抜くと爆発し、その身体が吹き飛んだ。狂乱した住民は我も我も手榴弾のピンを抜いた。だが、不発弾が多く、爆発しないのが多い。「本部から機関銃を借りて、皆を撃ち殺そう」と防衛隊員の誰かが言った。村長は「よし、そうしよう。みんなついてきなさい。」と先頭に立って、三百メートルほど南に構築中の部隊本部壕に向かった。住民はウアーと叫んで陣地になだれ込んだ。その時、アメリカ軍の砲弾が近くに落ち、住民はいよいよ大混乱に陥った。本部陣地では仰天した兵士らが「来るな、帰れ」と叫ぶ。「兵隊さん、殺して下さい。」と懇願する少女もいる。赤松隊長は防衛隊に命じ、事態を収めた。住民らはスゴスゴと二手に分かれて退散した。だが、午後八時過ぎ、ウアラヌフルモー(第一玉碎場)に戻った住民らは「神もおののく集団自決」を続行し、陣地東の谷間(第二玉碎場)に向かった金城武徳さんらは生き残った。そこでは、「玉碎」は終わっていたからだ。陣中日誌は記す。「三月二十八日午後八時過ぎから小雨の中敵弾激しく住民の叫び声阿

修羅の如く陣地後方において自決し始めた模様。(中略)三月二十九日、首を縛った者、手榴弾で一閃となって爆死した者、棒で頭を打ち合った者、刃物で首を切したる者、戦いとは言え、言葉に表し尽くしえない情景であった。」

一九九五年取材した元防衛隊員の大城良平さんは語った。「赤松隊長は、村の指導者が住民を殺すので、機関銃を貸してくれ、と頼んできたが断った、と話してくれました。赤松隊長は少ない食料の半分を住民に分けてくれたのです。立派な方です。村の人で赤松さんのことを悪く言う者はいないでしょう。」

同じく比嘉喜順さんは語った。「赤松さんは人間の鑑(かがみ)です。渡嘉敷の住民のために泥をかぶり、一切弁明することなく、この世を去ったのです。家族のためにも本当のことを世間に知らせて下さい。」僕はこの時点で「赤松さんは集団自決を命令していない」と確信した。だが、大きな謎が残った。なぜ、渡嘉敷の人たちは公(おおやけ)に「鉄の暴風」を非難し、赤松さんの汚名を責(す)す。こうとしないのだろうか。その答えは突然やってきた。

慶良間で何が起きたのか⑤

人間の尊厳を懸けた戦い

上原正稔

パンドラの箱を開けた宮城晴美さん

一九九五年六月下旬、沖縄タイムスの文化欄に座間味出身の宮城晴美さんが「母の遺言―切り取られた『自決命令』」を發表した。凄まじい衝撃波が走った。座間味村女子青年団長であった晴美さんの母初枝さんは、戦後、『家の光』誌で「住民は男女を問わず、軍の戦闘に協力し、老人、子供は村の忠魂碑前に集合して玉砕すべし」との命令が梅澤裕隊長から出された」と記していたが、その部分には「嘘だった」というのだ。「母はどうして座間味の『集団自決』が隊長命令だと書かねばならなかったのか」晴美さんは説明している。

―一九四五年三月二十五日。その夜、初枝さんに「住民は忠魂碑の前に集まれ」と伝令の聲が届いた。初枝さんはその伝令を含め、島の有力者四人と共に梅澤隊長に面会した。意味もわからぬまま、四人に従っていたのだ。有力者の一人が梅澤隊長に申し入れたことは、「最後の時がきた。若者たちは軍に協力させ、老人と子供たちは軍の足手まといにならぬよう忠魂碑の前で玉砕させたい」というものだった。初枝さんは息も詰まらんばかりのシヨックを受けていた。隊長に「玉砕」の申し入れを断られた五人はそのまま引き返した。初枝さんを除いて四人はその後自決した。

梅澤さんはこの場面に就いて大城将保さんへの手紙(一九八六年三月の沖縄資料編集所紀要)の中で次のように記している。「二十五日夜十時頃、戦備に忙殺されていた本部壕へ村の幹部が来訪してきた。助役宮城盛秀氏、収入役宮平正次郎氏、校長玉城政助氏、吏員宮平恵達氏および女子青年団長宮平(現宮城)初枝さんの五名。その用件は次の通りであった。一、いよいよ最後の時が来た。お別れの挨拶を申し上げます。二、老幼婦女子はかねての決心の通り、軍の足手まといにならぬよう、また食料を残すため自決します。三、つきましては思い通りに死ねるよう、村民一同忠魂碑前に集合するから中で爆薬を破壊させて下さい。それが駄目なら手榴弾を下さい。役場に小銃が少しあるから実弾を下さい。私は愕然とした。私は答えた。一、決して自決するでない。軍は持久戦により持ちこたえる。村民も壕を掘り、食料を運んであるではないか。生き延びて下さい。共にかんばりましょう。二、弾薬は渡せない。しかし、彼らは十分ほども動かず、懇願を続け、私はホトホト困った。折しも艦砲射撃が再開されたので、彼らは急いで帰って行った。」

晴美さんのコラムは梅澤さんの手記が正しかったことを裏付けたのだ。戦後、沖縄に援護法が適用されることになったが援護法は本来、軍人、軍属に適用されるもので、一般住民には適用されないものだ。そこで村当局は一隊長の命令で自決が行われており、亡くなった人々は戦争協力者として遺族に年金を支払うべきだ」と主張したと初枝さんは晴美さんに残した手記で記していたのだ。

二〇〇六年一月、産経新聞は琉球政府で援護課業務に携わった照屋昇雄さんに取材し、「遺族たちに戦没遺族援護法を適用するため、軍による命令ということにし、自分たちで書類を作った。当時、軍命令とする住民は一人もいなかった」との証言を得た。照屋さんは「嘘をつき通してきたが、もう真実を話さなければならぬ」と思った。赤松隊長の悪口を書かれるたびに、心が張り裂かれる思いだった」と涙ながらに語った。ところが、沖縄タイムスは「照屋氏は一九五七年には援護課に勤務していないという証拠がある」と産経新聞の「誤報」を報じたが、後日、照屋さんは大切に保管していた一九五四年の「任命書」を提出し、この問題は結着したが、タイムスがこの失態を報ずることはなかった。タイムスも新報も重要証人の照屋昇雄さんに一切取材していない。梅澤さんは前記の手記の終りに記している。「座間味島の軍命令による集団自決の通説は村当局が厚生省に対する援護申請のため作製した『座間味戦記』および宮城初枝氏の『血ぬられた座間味島』の手記が諸説の根源となっている。」初枝さんが梅澤さんに「本当にごめんなさい」と謝った時、梅澤さんは感涙したとのことだ。(つづく)

確認された米国からの「最大の成果と誇る米」となく「検査強化」で「だが米国産牛肉の安(染牛)が発見されれ」内容の「輸入条件緩和」相談話で「BSEで国を考えた」農林水産食

慶良間で何が起きたのか⑥

人間の尊厳を懸けた戦い

上原正稔

赤松さんは一九七〇年三月二十六日、渡嘉敷村に招かれ合同慰霊祭に参加する目的で那覇空港に着いた時、抗議団の怒号の嵐の出迎えを受けた。「何しにノコノコ出てきたんだ」「人殺しを沖繩に入れるな」「赤松帰れ」のシュプレヒコールが浴びせられた。赤松さんは結局、渡嘉敷に上陸することはかなわなかった。沖繩で殺人鬼と面罵され、故郷に戻る、事件を知った娘から「お父ちゃんはいやで沖繩の人たちを自決に追いやったのか」と責められた。赤松さんは「娘にまで誤解されるのは、何としても辛い」と記している。読者は赤松さんの人格について知らないものと思う。赤松さんの「ひととなり」を伝える二通の手紙を僕は一九九五年比嘉(旧姓安里)喜順さんから預かったが、それをここで紹介しよう。

赤松さんは一九七〇年三月二十六日、渡嘉敷村に招かれ合同慰霊祭に参加する目的で那覇空港に着いた時、抗議団の怒号の嵐の出迎えを受けた。「何しにノコノコ出てきたんだ」「人殺しを沖繩に入れるな」「赤松帰れ」のシュプレヒコールが浴びせられた。赤松さんは結局、渡嘉敷に上陸することはかなわなかった。沖繩で殺人鬼と面罵され、故郷に戻る、事件を知った娘から「お父ちゃんはいやで沖繩の人たちを自決に追いやったのか」と責められた。赤松さんは「娘にまで誤解されるのは、何としても辛い」と記している。読者は赤松さんの人格について知らないものと思う。赤松さんの「ひととなり」を伝える二通の手紙を僕は一九九五年比嘉(旧姓安里)喜順さんから預かったが、それをここで紹介しよう。

一九七〇年四月二日付の赤松さんからの比嘉さんへの手紙は次のように綴られている。「(前略)今度の渡沖については全く合点が行かず、なんだか一人相撲を取ったようで釈然と致しませぬ。(中略)村の戦史については軍事補償その他の関係からあの通りになったと推察致し、できるだけ触れたくなかったのですが、あの様な結果になり、人々から弁解のようにとられたことと存じます。しかしマスコミも一部不審を抱いているように感じられましたので、いつか正しい歴史と私たちの善意が通じることと信じております。四月十七日付の手紙は次のように伝えている。「(前略)安里さんにはあのような俗説の流布されている中、ただ御一人で耐え忍び、ご心中のほどご察し申しあげております。(中略)先日、元琉球新聞の記者より手記を書いてくれ、と言われ、聞いたところによりますと、現在マスコミの半分ほどは赤松さんを信じていると申されておりますが、一度世に出し、これほど流布されてからは難しいだろうから郷友会などを取材して新たに真実のものを出したらどうかと言っておきました。いづれにしても、私たちは真相が明白にされ、私たちの汚名が拭い去られる日を期待し、努力しております。一日も早く沖繩の人々にも理解していただき、私たちと島民が心を合わせて共に戦つたように、次の世代の人々が憎しみ合うことなく本土の人々と仲よくやっけてゆけることを祈つてやみません。安里さんも機会をつくって、ぜひ本土に来てください。皆、歓迎してくれと思います。また子供さんの勉学につきましても私たちが

ご利用下さい。いくらかでも戦時中のご恩返しできれば幸いです。奥様はご病気のとのことですが、その後いかがですか。すでに沖繩は暑いと思えますので御自愛の一のほどお祈り致します。敬具 赤松嘉次

これが慶良間の「集団自殺(集団自決)という言葉は伊佐良博記者の創作であると、本人が記している」の真相だ。だが、沖繩タイムスの「鉄の暴風」は今も発行され続け、次のように伝えている。「恩納河原の自決のとき、島の駐在巡査(安里喜順さんのこと)一緒だったが、彼は「自分は住民の最後を見とどけて、軍に報告してから死ぬ」と言って遂に自決しなかった。赤松大尉は「軍として最後の兵まで戦いたい。まず非戦闘員をいさぎよく自決させ、われわれ軍人は全ての食糧を確保して、持久態勢をととのえ、敵と一戦を交えねばならぬ。事態はこの島に住むすべての人間に死を要求している」ということを主張した。(中略)座間味の戦隊長梅澤少佐は米軍上陸の前日、忠魂碑前の広場に住民を集め、玉砕を命じた。住民が広場に集まってきたその時、近くに艦砲弾が落ちたので、みな退散してしまつたが、村長はじめ役場吏員などその家族は各自の壕

で手榴弾を抱いて自決した。日本軍は最後まで山中の陣地にこもり、遂に全員投降。隊長梅澤少佐のごときは、のちに朝鮮人慰安婦らしきもの二人と不明死を遂げた。

この記述には真実の「カケラ」もない。これは誰の目にも明らかだろう。正に「見てきたような嘘」ではない。ノーベル賞作家家の大江健三郎はこの「鉄の暴風」の記述をそのまま信じ、「沖繩ノート」で旧軍指揮官を糾弾したので。人は誰であれ、己の目の高さでしか物を見ることができない。だから、信じたいことを信じ、自分に都合のよいことを信じてしまうのだ。だが、慶良間の「集団自殺」については赤松嘉次さんと梅澤裕さんが命令していることにははっきり入りしている。

人間の尊厳を取り戻す時僕は一九九六年六月琉球新聞の「沖繩戦シヨウダウン」の中で言明したが、もう一度ここで述べよう。「沖繩の新聞、特に沖繩タイムスの責任は限りなく重い。そして一人の人間をスケープゴート(生贖)にして、「集団自殺」の責任をその人に白わせてきた沖繩の人々の責任は限りなく重い。僕は長い間、赤松さんと梅澤さんは「集団自殺」を命令したとの先入観を拭い去ることができなかった。真実が明らかになった今、赤松さん、梅澤さん、そしてご家族の皆様さん本当にご免なさいと謝罪しよう。そして今、僕は一つ脱皮して一つ大人になることができた。

2011年10月中旬、ぼくは兵庫県を訪れ、赤松嘉次さんの弟秀一さんに迎えられ、一緒に嘉次さんのお墓参りをした。ぼくには神も仏も遠い存在だったが、長年の重荷を下ろし、何だか心が軽くなった。

だが、大きな問題が残されている。自分の親、子、兄弟を殺して遺族年金を受け取っていることは誰も語りたくないし、語れないものだ。僕は知識人でもなく、文化人でもなく、宗教家でもなく、道徳家でもない。だが、僕は知っている。自分が愛する家族に手をかけた者はいつまでも忘れず、心を痛めているのだ。だが、それを軍隊のせいにして、他人の教育のせいにして、他人のせいにしてはならない。自分のせいにしてはならない。自分のこととしてとらえない限り、心が癒されることはないのだ。そして、赤松さんと梅澤さんとそのご家族にきちんと謝ることだ。誰も彼らを責める者はいない。実際、座間味で母親に首を切られたという青年は「母親を恨んでいるか」との質問に「そんなことはありません。母を心から愛しています」ときつぱり答えた。赤松さんも梅澤さんも心の広い人間だ。きつと許してくれるはずだ。いや、きつと「ありがとう」と言つてくれるだろう。それが人間の尊厳を取り戻すということだ。僕はそう信じている。(おわり)

2011年10月中旬、ぼくは兵庫県を訪れ、赤松嘉次さんの弟秀一さんに迎えられ、一緒に嘉次さんのお墓参りをした。ぼくには神も仏も遠い存在だったが、長年の重荷を下ろし、何だか心が軽くなった。

だが、大きな問題が残されている。自分の親、子、兄弟を殺して遺族年金を受け取っていることは誰も語りたくないし、語れないものだ。僕は知識人でもなく、文化人でもなく、宗教家でもなく、道徳家でもない。だが、僕は知っている。自分が愛する家族に手をかけた者はいつまでも忘れず、心を痛めているのだ。だが、それを軍隊のせいにして、他人の教育のせいにして、他人のせいにしてはならない。自分のせいにしてはならない。自分のこととしてとらえない限り、心が癒されることはないのだ。そして、赤松さんと梅澤さんとそのご家族にきちんと謝ることだ。誰も彼らを責める者はいない。実際、座間味で母親に首を切られたという青年は「母親を恨んでいるか」との質問に「そんなことはありません。母を心から愛しています」ときつぱり答えた。赤松さんも梅澤さんも心の広い人間だ。きつと許してくれるはずだ。いや、きつと「ありがとう」と言つてくれるだろう。それが人間の尊厳を取り戻すということだ。僕はそう信じている。(おわり)